

ロシア語のアスペクトと時の前置詞 «в» および «на» との 関係について

Связь между видом глагола и временными предлогами «в» и «на»

井上 幸義
INOUE Yuki Yoshi

В настоящей статье сделана попытка показать целесообразность сопоставления признаков действия, выраженного совершенным и несовершенным видом глагола, с временными предлогами «в» и «на». На первый взгляд, в значении глагольного вида нет никакой связи со значением предлогов «в» и «на», но анализ значения СВ и временного предлога «в» показывает общее представление об «ограниченности» и «сомкнутости» действия, а также времени. В то же время для НСВ и предлога «на», как правило, свойственно отсутствие такого представления. Все это подтверждает выдвинутую нами идею сопоставления признаков действия, выраженных СВ и НСВ, со значением временных предлогов «в» и «на». Далее можно сделать предположение, что в истории русского языка дифференциация временных предлогов «в» и «на» происходила параллельно с видовой дифференциацией глаголов в зависимости от соотношения наличия значений «ограниченности и сомкнутости» или же их отсутствия.

はじめに

ロシア語の動詞の体（アスペクト）の研究において、完了体を有標、不完了体を無標とする二項対立の視点から、有標の完了体の不変的意味（инвариантное значение）として、これまで完結性（законченность）、結果性（результативность）、点状性（точечность）、限界性（предельность）、全一性（целостность）などが提唱されてきた。1980年刊行のアカデミー文法（Русская Грамматика 1980, I）は、これらのうちの限界性と全一性との

折衷の意味特徴として、完了体を「限界によって区切られた全一的動作 (ограниченное предельное целостное действие)」を意味する動詞、一方、不完了体を「限界によって区切られた全一的動作という特徴をもたない」動詞と規定した [7: 583]。さらに、近年、ヴェジュビツカ (Wierzbicka A.) による、ポーランド語動詞のメタ言語に基づく意味記述の研究¹や、それをロシア語に応用したグロヴィンスカヤ (Гловинская М.Я.) による、動詞の「開始性」から見た語彙の意味分析²など多くの試みがなされてきている。しかし、これらの研究は、いずれも動詞の意味や動詞が表す状況という、動詞を中心とする考察にとどまっている。不完了体動詞も完了体動詞も時間の流れに対する見方が反映されたものであり、これらの動詞の意味特徴を明らかにするためには、同じく時間を表すロシア語のその他の表現、とりわけ、時間の前置詞 «в»・«на» との比較考察が有効であろう。本稿では、このような新たな視点から、完了体と不完了体が表す時間的特徴を、時の前置詞 «в» と «на» が表す時間的特徴と対照することによって、完了体と前置詞 «в» がともに、行為や時間の限界性および閉鎖性 (сомкнутость) という共通のイメージを表すのに対し、不完了体と前置詞 «на» はどちらも、これらのイメージを有していないことを明らかにする。さらに、ロシア語の歴史において、もともと明確な使い分けがなされていなかった前置詞 «в» と «на» の時間的意味が差異化 (дифференциация) されていった過程と、やはり明確な体系をもっていなかったアスペクトが差異化されていった過程が、互いに無関係ではなく、それぞれ時間と動作の「限界性」と「閉鎖性」という共通のイメージに基づいて相関して起こった可能性について論ずる³。

1. 前置詞 «в» と «на» が表す空間と時間のイメージ

完了体・不完了体の同形動詞を除くすべての動詞が完了体、不完了体

-
- 1 *Wierzbicka A.* On the semantic of the verbal aspect in Polish // To Honor Roman Jakobson. Essays on the occasion of his seventieth birthday. Paris, Mouton, 1967.
 - 2 *Гловинская М.Я.* Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола. М., 1982.
 - 3 本稿は、2012年9月19日から22日までペトロザヴォツク国立大学で開催された国際学会「第3千年紀のはじまりにおけるロシア学 (Русистика в начале 3-го тысячелетия: проблемы, итоги, перспективы)」での口頭発表 «Вид глагола и временные предлоги «в» и «на»» に大幅な加筆訂正を施したものである。

のいずれかであるように、場所を表すすべての名詞もまた、前置詞 «в»、«на» のいずれか一方とのみ結びつく。この意味で、動詞の体と同様に前置詞 «в» と «на» もまた有標・無標の二項対立を成すと考えられる。一般的に、場所を表す前置詞 «в» は、限定された空間というイメージを表す有標であり、一方前置詞 «на» は限定されない平面的な場所というイメージを表す無標であると考えられる。

ロゼンターリ (Розенталь Д.Э.)、ジャンジャコヴァ (Джанджакова Е.В.)、カバノヴァ (Кабанова Н.П.) は、場所の意味を表す前置詞 «в» と «на» の用法を比較し、「場所の意味としての前置詞 «в» の用法は、区切られた空間 (ограниченное пространство) というイメージと結びついており、この意味がない場合は前置詞 «на» が用いられる」[6: 288] と述べ、以下のような *во дворе* と *на дворе* の用例を挙げながら、これらの意味の違いを解説している。

Машины стояли во дворе (окруженное забором или домами пространство)
(車が中庭に駐車していた [во дворе : 塀や家々で囲まれた空間に])

Дети играли на дворе (вне дома; ср. *на дворе сегодня холодно*)
(子供たちは戸外で遊んでいた [на дворе : 戸外で。比較せよ : 外は今日は寒い]) [6: 288]

場所の前置詞 «в» と «на» のこのような意味の違い、つまり、前置詞 «в» は区切られた空間というイメージを表す有標であり、前置詞 «на» はこの意味をもたない無標であるという差異は、前置詞 «в» と «на» が表す時間の意味の違いにも表れていると言えるだろう。たとえば、「в детстве» (子供のころ) という語結合は、少年時代 (отрочество) までの限定された、閉じられた時間 (сомкнутое время) というイメージと結びつくのに対し⁴、「на закате» (日暮れ時に) という表現は、地平線の向こうに太陽が沈むとき (закат) を表し、閉じられた時間というより、線状に伸びた時間的長さ (линейная протяженность) としてイメージされるのである。

4 детство の語義として、*Ожегов С. И. и Шведова Н. Ю.* Толковый словарь русского языка. М., 1992 は、*Ранний, до отрочества возраст; период жизни в таком возрасте.* を挙げている。

2. 完了体と不完了体が表す時間のイメージ

上述の、前置詞 «В» が有する区切られ閉じられた空間や時間という意味特徴は、完了体動詞によって表される動作の限界性、全一性という意味特徴と相似形をなすものであると想定できる。また一方、前置詞 «на» には限定性という意味特徴がないというイメージは、不完了体動詞によって表される動作が限界性、全一性という意味特徴をもっていないというイメージと重なり合う。これまで、完了体動詞の不変的意味として、完結性、結果性、点状性、限界性、全一性などが挙げられてきた。ボンダルコ (Бондарко А.В.) は、全一性という特徴と、限界による動作の限定性という特徴との類似点を求め、それらふたつを「限界によって区切られた全一的動作 (ограниченное предельное целостное действие)」という統一体に統合した [1:103]。この定義を上述の 1980 年刊行のアカデミー文法で提示していたわけであるが、全一性という概念は、動作の始まり、中間そして終わりの指示を含むものである。イサーチェンコ (Исаченко А.В.) は、不完了体と完了体の違いを、これらが表す動作を眺める話し手の視点からの立ち位置に例え、「話し手は、不完了体の諸形態によってプロセスを表すとき、あたかもプロセスそのものの流れの中にあるかのようなようである。話し手は、プロセスの初めも終わりも見えない、したがって、このプロセスを、閉じられた一体的な出来事 (сомкнутое, цельное событие) として表現することができない (...) 完了体では、話し手は、あたかもプロセス全体を概観しながら、プロセスの外にあるかのようなようである (...) 完了体は、全一的で閉じられた出来事 (целостное, сомкнутое событие) としてプロセスを提示するのに対し、不完了体は、この補足的意味を欠いている」 [3: 133-136] として、「閉じられた出来事」という完了体の概念を提示している⁵。

本稿では、この「閉じられた」という概念を手掛かりに、完了体動詞で

5 イサーチェンコによれば、完了体の動作が「閉じられた (сомкнуто)」のものであるという見解は、チェコの言語学者エミール・チェルニー (Emil Černý; Эмиль Черный) が 1877 年にその著書 «Об отношении видов русского глагола к греческим временам» (СПб. 1877) (ロシア語動詞の体とギリシア語の時制の関係に関して) で最初に提起したものである。イサーチェンコは、「チェルニーは、『完了体は、動作を集合的に、閉じられた形で (сомкнуто)、全体として、総括的に、簡潔な形で提示するものである』という定義をした」 [3: 131] としている。

表される動作を「閉じられた動作」(сомкнутое действие)、不完了体動詞で表される出来事を「閉じられていない動作」(несомкнутое действие)であると推論し、これらの関係から始動のみを表す完了体単体動詞を含む文の位置づけも試みる。さらに、時を表す前置詞 «в» と «на» にそれぞれこれらの意味が対応するか否かを検証する。

以上の考察のために、まず、完了体あるいは不完了体を含む文が表す動作の意味を以下の7つに分類し、分析を行う。(1) 動作の状態とプロセス、(2) 反復する動作と単一の動作、(3) 動作の発展と動作の限界の達成、(4) 動作の一般的事実、(5) 瞬間的動作、(6) 動作の全一性、(7) 始動。なお、これらの動作の特徴を表す記号として、動作の始まりおよび達成・完結を点●で、達成・完結されていない(あるいはいったん達成・完結されたが無効化されてしまった)目標としての終わりを丸○で、そして継続的動作を線——で表すこととする。この線だけで表される動作は、閉じられていない、すなわち動作の「非閉鎖性」(несомкнутость)を意味する。

(1) 動作の状態とプロセス

- a) Он *спал*. (彼は眠っていた) : ——— 不完了体
 б) Он долго *работал*. (彼は長い時間働いていた) : ——— 不完了体

例文 a) と б) は、それぞれ動作の状態(眠っていた)とプロセス性(働いていた)を表し、これらの動作特徴は、線——で表すことができる。どちらも動作が閉じられていない「非閉鎖性」という特徴を有している。

(2) 反復する動作と単一の動作

- a) Раньше он обычно *обедал* в столовой. ——— 不完了体
 (以前、彼は普段は食堂で昼食をとっていた)
 б) Вчера он *пообедал* в столовой. ● 完了体
 (昨日、彼は食堂で昼食をとった)
 в) Он *посещал* музей несколько раз. ——— 不完了体
 (彼は美術館を、何回か訪れたことがある)
 г) Он *посетил* музей несколько раз. ●●●● 完了体
 (彼が美術館を訪れたのは何回かだった)

例文 a) と b) の不完了体は、ともに反復を意味する、副詞 *обычно* と時の状況語 *несколько раз* をともない、反復する非閉鎖性の動作「普段昼食をとっていた」、「何回か訪れたことがある」を意味している。これらの動作特徴は、連続する線 ———— で表すことができる。ここでは、どちらの不完了体の例も、動作が閉じられていないことを示している。

一方、例文 b) の動詞は完了体で、単一で全一的で完結され閉じられた動作「昨日、食堂で昼食をとった」を表している。この動作特徴は、点●で表される。

それに対し、例文 r) では、反復の状況語 *несколько раз* をともないながら、完了体 *посетил* で表される 1 回 1 回の動作が全一的で閉じられているという、一見矛盾する動作が意味されており、それによって、反復される動作が独立して目の前に 1 回 1 回浮かぶような、*наглядно-примерное значение* (例示的意味) が提示されている。したがって、この動作特徴は、連続する点 ●●●● で表すことができる。

ここで注目すべきは、完了体の例文 b), r) とともに、動作が 1 回 (あるいは毎回) 閉じられていることを示しているということである。

(3) 動作の進展性と動作の限界の達成

a) *Рабочие строили здание.* ———○ 不完了体

(労働者たちは建物を建造していた)

b) *Рабочие построили здание.* ●——● 完了体

(労働者たちは建物を建造した)

例文 a) の不完了体は、プロセス性を保ちながら「建造する」という動作の内的限界 (完成) に向かって進展していく動作を意味している。話し手の関心は動作の開始には向けられておらず、また同時に、動作も完遂しておらず、完遂は目標として意識されているにすぎない。この点で、この動作は、同じ不完了体で表現されながらも進展性のない状態だけを示す例文 (1)a) の「眠っていた」や、やはり進展性のないプロセス性だけを示す例文 (1)b) 「働いていた」とは異なって認識されるであろう。この動作特徴は、プロセス性の線 ——— と、達成されていない目標としての丸○の両方が組み合わせられた記号 ———○ によって表すことができる。この不完了体の用

例も、動作が閉じられていないことを示している。

一方、例文 6) は、「建造した」という動作の限界の達成を表している。ここで、話し手は、開始、達成を含めた動作全体を視野に入れているとすることができる。つまり、開始と完了というふたつの動作点とその中間をもつ閉じられた動作が意味されており、この動作特徴は、記号 ●——● で表すことができる。この完了体の例は、動作が閉じられていることを示している。

(4) 動作の一般的事実

(4)-1 一般的事実で結果を意味する文

- a) *Зимний дворец строил Растрелли.* ——● 不完了体
 (冬宮を建造したのはラストレリであった)
 (построил 「建造した」(完了体) という結果の意味を含む)

(4)-2 一般的事実で結果の無効を意味する文

- б) *К тебе кто-то приходил.* ——→● 不完了体
 (君のところにだれか来ていたよ) ←——○
 (来ていたがもう帰った (пришел и ушел) という結果の無効の意味)

(4)-3 一般的事実で結果を伴わない意味の文

- в) *Я умолял ее вернуться.* ——○ 不完了体
 (私は彼女に戻るように説得してみた)

(4)-4 一般的事実で非限界の意味をもつ文

- г) *В детстве Маша боялась мышей.* —— 不完了体
 (子供のころマーシャはネズミを怖がったものだった)

上記の4つの例文の動詞はすべて不完了体で、いずれも一般的事実を意味しているが、それぞれ一般的事実の意味のうちさらに結果、結果の無効、結果の不付随、非限界という別々の意味を表している。以下、順に考察してみよう。

例文 a) では、不完了体が一般的事実としての結果を意味している。ここでは、語順が倒置されていて、文のテーマ *Зимний дворец строил* (宮殿を建造したのは) に対し、レーマは *Растрелли* (ラストレリ) であり、

話し手の関心は、一般的事実としてすでに建設されているという結果が知られている建物（冬宮）を「だれが建造したか」という一点に絞られている。この文は、結果を表す完了体の построил と同じ意味を一般的事実として表しているが、話し手の意識には、一般的事実としての建造物の完成（завершенность）は含まれていながら、開始は含まれていないという点で、開始も終了も含まれる完了体 построил の閉じられた動作とは認識のされ方が異なる。すなわち、この場合の不完了体 строил は、「半分閉じられた動作」（полусомкнутое действие）を表すことになり、これは記号——●で示することができる。では、本来完了体の機能であるはずの結果を、なぜ不完了体が意味することができるのであろうか。前述のように、イサーチェンコ（Исаченко А.В.）は、不完了体でプロセスを表すとき、話し手は、プロセスそのものの流れの中にあるかのようにであり、完了体では、話し手はプロセス全体を概観しながら、プロセスの外にいるかのようにであると指摘している。この話し手の視点という要素を考慮するなら、不完了体が一般的事実として結果を意味し得るのは、話し手が、完了体のときのように、プロセスの外にいて、プロセスの終わり、結果にだけ視点を合わせているからであろう。それにより、半分閉じられた動作として認識されるのであろう。また、この一般的事実の意味は、同じ不完了体の例文 3a) Рабочие строили здание.（労働者たちは建物を建造していた）のような、話し手の関心が、動作の開始には向けられておらず、なおかつ、動作も達成されずその完遂が目標として意識されているだけの、閉じられていない動作——○とも異なる。以上から、不完了体によって表される動作は、閉じられていない動作か、あるいは、半分閉じられた動作を表し、完全に閉じられた動作を表す完了体とは閉鎖性（сомкнутость）において異なり、また、一般的事実を表す不完了体では、話し手は、プロセスの外にいて動作の存在そのものを概観していると推論することができる。

例文 6) の不完了体は、動作の結果がいったん達成された（だれかが来た）後、反対方向の動作（帰った）によってその動作が無効化された（今はもういない）ことを表している。換言すれば、いったん「来た」という結果が出されることによって半分閉じられた動作が、反対方向への運動によって打ち消され、閉じられていない動作に変換されたことになる。これを記号化すれば、

いったん達成され半分閉じられた動作は $\rightarrow\bullet$ で、反対方向の動作は \leftarrow で、また、無効化された動作は、達成されなかった動作 \circ で表され、合わせて：

$\longrightarrow\bullet$

$\longleftarrow\circ$

という記号に置き換えることができるであろう。この不完了体の用法も、動作が閉じられていないことを示し、話し手は、プロセスの外にいて動作の達成とその無効化そのものを上から眺めていると言えるだろう。

例文 b) の不完了体は、一般的な事実としての動作（説得してみた）が結果を伴わなかった可能性を示唆している。この動作特徴は、事実としてあった動作と結果が達成されなかった可能性を示唆する動作の組み合わせとして $\longrightarrow\circ$ という記号で表すことができる。この不完了体の用例も、閉じられていない動作を示し、話し手は、プロセスの外にいて動作そのものを概観している。

例文 r) の不完了体は、一般的事実そのもの（怖がったものだった）を強調し、プロセス性とも反復性とも結びつかない。この動作特徴もまた、閉じられておらず、 \longrightarrow という記号で表すことができる。話し手は、一般的事実そのものを外から概観しており、この点でプロセス性を表す不完了体とは異なる。

プロセスを表す不完了体の場合にはプロセスそのものの中に話し手の視点があったと言えるのに対し、上述の (4) の 4 つの例文が示しているように、不完了体が一般的事実を意味する場合、話し手は、あたかも上からの視点でその完遂の時点や動作の存在そのものを俯瞰していると言えるだろう。

(5) 瞬間的動作

Порох вспыхнул.

● 完了体

(火薬がパッと燃え上がった)

この完了体の例文は、動作の始まりと終わりがほとんど同時でその中間がない、瞬間的で点状的な閉じられた動作を表している。動作特徴は、● で表すことができる。

(6) 動作の全一性

Старик прожил долгую трудную жизнь. ●——● 完了体
(老人は、長く苦しい人生を全うした)

この例文は、動作の始まりと終わりというふたつの点とその中間をもつ全一的で閉じられた完了体の動作を表している。動作特徴は、●——●で表すことができる。

(7) 始動

a) *Отец рассердился и закричал высоким голосом.* ●(- - - - -) 完了体
(父親は激昂すると高い声で叫び声をあげた)

b) *Впервые она запела в 8 месяцев.* ● 完了体
(はじめて彼女が歌ったのは8か月の頃だった)

v) *Он стал кричать что-то в телефонную трубку.* ●(——) 不完了体
(彼は受話器に向かって何か叫び始めた)

この3つの例文は、始動を表すという点では共通しているが、その後動作が継続されるかどうかという点と意識的か無意識的かという点で異なる。

完了体の例文 a) では、*рассердился* (激昂した) と連動して *закричал* (叫び声をあげた) という動作が逐次的に行われている。話し手の関心は、「叫び声をあげる」という動作の初めにだけ向けられ、その瞬間で、起動相動詞 (verba inchoativa) である *закричал* の動作は完結し閉じられていて、それ以降継続するはずの動作 (*кричать*) にはほとんど関心は払われていない。また、その動作は無意識に行われている。これは、●(- - - - -) という記号で表すことができるだろう。ここで、●はそれ自体で完結した閉じられた動作を、(- - - - -) は話し手の関心がほとんど向けられていない継続する動作を表している。

一方、例文 b) では、同じ完了体の起動相動詞で単体動詞の *запела* は、瞬間的な意味は表さず、またそれに継続する動作もなく、その後反復される「歌う」という行為に対し、はじめての、それ自体で完結した閉じられた行為 (歌った) だけを表している。ここでは、記号で示せば、●となる。同じ接頭辞 *за-* をもちながら、例文 a) の無意識の動作 *закричал* に対し、例文 b) では意識的動作を示している。

また、例文 B) では、完了体 *стал* (なった) と不完了体 *кричатъ* (叫んでいる) が組み合わせられている。*стал* は一瞬の始動という閉じられた意識的な動作を表し、不完了体はその後継続する動作を意味している。ここでは、始動そのものが全一的で完結し (記号で表せば ●)、 「叫んでいる」という継続する動作がそれに続いて話し手に認識され、記号なら (——)。すなわち、●(——) という、完結した動作と継続する動作の組み合わせの記号で表すことができるだろう。これらの記号によって、同じ始動を表しながら、接頭辞 *за-* では、話し手の関心がそれに継続する動作に向けられていないために、急に勢いよく動作が行われる様子が表され、一方、関心が引き続き向けられる *начать* (*стать*) + 不完了体ではそのような勢いはないことが例示的に表されている。類像性 (*iconicity*) という視点から見れば、1語で表される、接頭辞 *за-* が付く単体動詞は、一括的認知という類像性を、一方、2語で表される *начать* (*стать*) + 不完了体は、始動+継続性という非一括的認知の類像性を表していると言えるだろう。この非一括的認知を記号化するなら、●(——) となるという点で、例文 4a) の一般的事実としての結果を表す半分閉じられた動作、——●とも異なることが例示される。

以上から、完了体動詞を含む文は、初めと終わりというふたつの点とその中間をもつ動作、あるいは、瞬間的で一体的な動作という、いずれも閉じられた動作を意味し、一方、不完了体動詞を含む文は、閉じられていない動作、あるいは、半分閉じられた動作を表すと結論付けることができる。すなわち、完了体は閉鎖性 (*сомкнутость*) を有するという点で有標であり、不完了体は非閉鎖性 (*несомкнутость*) や半閉鎖性 (*полусомкнутость*) を有し、完全な閉鎖性によっては特徴づけられないという点で無標である、と言えるであろう。

では、次に、完了体と不完了体がそれぞれ表す時間のイメージと、前置詞 «в» と «на» がそれぞれ意味する時間のイメージとの間に類似性、あるいは関係性があるかどうか検討してみよう。

3. 前置詞 «в»・«на» の時間のイメージと完了体・不完了体の時間のイメージとの関係

現代ロシア語において、時の前置詞 «в» と «на» は、時間の単位を表す名詞の対格や前置格と結びついて、動作時点を表したり、特定の時間の中における時点としての不特定の時間を表したりする。その際、前置詞 «в» は、день (日) を含めそれ以下の時間の長さを表す名詞の対格と結びつく。たとえば、時間の長い方から短い方に並べると、в тот день (その日に)、в пять часов (5時に)、в эту минуту (その時(分)に)、в ту секунду (その間(秒)に)、в этот момент (その瞬間に)、в этот миг (その一瞬(瞬き))となる。これらの状況語は、時点に関する点状的で閉じられた時間に関するイメージと結びつけられる。筆者の考えでは、このようなイメージは、完了体によって表現される *Порох всыпнулся.* (火薬がパッと燃え上がった) のような瞬間的で点状的で閉じられた動作というイメージと結びつけられる。

また同時に、前置詞 «в» は、месяц (月) を含めそれより大きい時間の長さを表す名詞とは前置格で結びつく。時間の短い方から長い方に並べると、в этом месяце (今月に)、в этом году (今年に)、в 21-м веке (21世紀に)、в третьем тысячелетии (第3千年紀に)となる。これらの状況語は、時間的長さをもつ全一的な時間のイメージと結びつき、その全一的時間の内部で時点としての不特定の時間があらわされるのである。筆者の意見では、このようなイメージは、完了体によって表現される *Старик прожил долгую трудную жизнь.* (老人は、長く苦しい人生を全うした) のような、はじまりと終わりというふたつの点とその中間をもち、時間的長さが意識される全一的で閉じられた動作というイメージと重なり合う。

そして、день と месяц の間の時間単位である неделя (週) は、ロムテフ (Ломтев Т. П.) の表現によれば、「一定時間の内部の動作時点としての不特定時間」[4: 334]を意味する前置詞 «на» と前置格で結びつき、на этой неделе (今週) というように用いられる。この句は、曜日が線状に横に並んで1週間をなすという類像性から、線状で閉じられていない時間というイメージと結びつけられ、不完了体で表現される *Он спал* (彼は眠っていた) のような、話し手の関心が、線状に続く動作の状態に向けられている、閉じられていない動作と呼応していると考えることができる。

現代ロシア語におけるこれらの前置詞と格との関係を図式化すれば、

(1) 前置詞 «в» + 対格 (в этот миг, в этот момент, в ту секунду, в эту минуту, в пять часов, в тот день) = 点状的で閉じられた時間：

● (完了体の動作と同じイメージ記号)

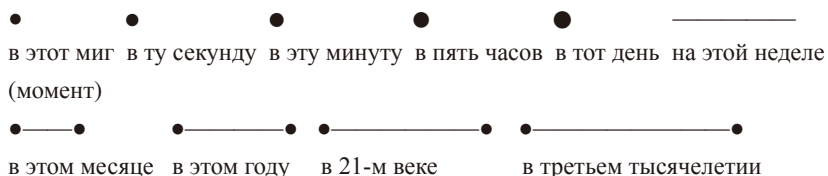
(2) 前置詞 «в» + 前置格 (в этом месяце, в этом году, в 21-м веке, в третьем тысячелетии) = はじめと終わりのふたつの点とその中間や時間の長さを意識させる全一的な閉じられた時間：

●——● (完了体の動作と同じイメージ記号)

(3) 前置詞 «на» + 前置格 (на этой неделе) = 線状で閉じられていない時間：
—— (不完了体の動作と同じイメージ記号)

となるであろう。

これらの前置詞句を時間の短い方から順に並べると、次のような図式になる。



以上から、現代ロシア語において、完了体と時の前置詞 «в» は、ともに限界性と閉鎖性という共通のイメージをもち、その意味で有標であり、また、不完了体と時の前置詞 «на» は、どちらもこのようなイメージを欠き、その点で無標であると結論付けることができる。

4. 前置詞 «в»・«на» の時間的意味の進化と、不完了体・完了体の意味の対立の発達との相関性

上述のように、現代ロシア語の場合、完了体と時の前置詞 «в» は、ともに限界性と閉鎖性という共通のイメージをもち、不完了体と時の前置詞 «на» は、どちらもこのようなイメージを欠いていることが明らかになったが、これらの対立は歴史的に次第に獲得されてきたものである。古代ロシア語においては前置詞 «в» と前置詞 «на» は、互いに場所や時間の意味に

においてまだ完全には差異化されておらず、混用されていたために、現代ロシア語における限界性・閉鎖性という明確な差異化マークはまだ見られなかった。

この、古代ロシア語における前置詞の不完全な差異化について、ロムテフ (Ломтев Т. П.) は、次のように例証している。「動作が実現される場所あるいは対象の所在の場所を意味するために、前置詞 «на» + 所格、前置詞 «в» + 所格というふたつの構文が用いられていた。現代におけるような、これらの構造の厳密な差異化はまだなかった (...) こうして、«на русской земле» (ロシアの大地に) と «в русской земле» (ロシアの大地に)、«на семь свѣтъ» (この世に) と «в семь свѣтъ» (この世に) などの用法のヴァリエーションが見られたのである。同様に、古代ロシア語では、特定の時間内の時点を示す不特定の時間を意味するために4つの前置詞構文、すなわち、«на» + 対格、«на» + 所格、«в» + 所格、«в» + 対格が用いられていた。たとえば、«на весну» (春に)、«на придущемъ вѣцѣ» (来世で)、«в дне» (その日に)、«въ осень» (秋に) などである」[4: 333-339]。さらにロムテフは、その後起こる前置詞の差異化について、「ロシア語のその後の歴史において、当該の意味での «на» + 対格は次第に用いられなくなっていったが、«на» + 所格は、太陽の位置に関連する一日の部分の名称、たとえば、«на заре» (夜明けに)、«на закате» (日没時に) のような表現とともに使用され続けた。一方、«в» + 所格は、月の名称や順序数詞の定語がついた名詞ではそのまま用いられた。「в» + 対格は、週の曜日の名称にだけ使われるようになった (...) このことは、ロシア語の歴史の中で、これらの時の前置詞構文において、意味の差異化が起こったことを物語っている」[4: 333-339] と述べている。ロムテフは、時を表す前置詞句の意味の差異化が何に基づいて起きたのか、その要因については明らかにしていない。恐らく、上述の考察のとおり、«на заре» (夜明けに)、«на закате» (日没時に) のような «на» + 前置格は、線状で閉じられていない時間 (——) として認知され、これと同じイメージを、閉じられていない動作として不完了体が表したのであろう。また、«в марте» (3月に) のような時間的長さが強く認識される名詞における時点の場合は、はじめと終わりの両方とその中間を意識させる全一的な閉じられた時間 (●——●) として «в» + 前置格がそのまま残り、これと同じイメージを、全一的な閉じられた動作とし

て完了体が表したのであろう。さらに、月より時間的長さが短い、曜日やそれ以下の時間を表す名詞が表す点状的で閉じられた時間 (●) というイメージと同じイメージの動作も完了体が表したのであろう。

一方、古代ロシア語において、接頭辞をもたない段階での動詞のAspect的意味も、差異化は未発達であった。ヤノヴィッチ (Янович Е.И.) は、これら無接頭辞動詞のAspect的意味についてこう言及している。「単純な無接頭辞動詞は、11～12世紀の文献の言語に特徴的であった、Aspect的意味における不完全な差異化という状況のせいで、現在・未来時制は未分化の形態をとったままであり、この形態の意味はコンテキストに依存していた。一方、過去の動作に関しては、これらの単純な無接頭辞動詞は、アオリストも、インパーフェクトも形成することを可能にしていたのであった」[8: 121]。このことは、初期の無接頭辞動詞はわずかに過去時制において差異化の傾向が見られただけで、現在・未来時制においては未分化であったことを示している。

古代ロシア語における前置詞と接頭辞の用法の歴史的变化とAspect的対立の発達の関係に関して、イヴァノフ (Иванов В.В.) は重要な指摘をしている。少し長くなるが以下に引用する。「周知のとおり、前置詞は、大概の場合、空間関係を表してきたし、また表している。その後、それらの空間関係から、様々な意味、とりわけ時間に関する意味が発達していった。それに続き、接頭辞の様々な時間的な意味をベースとして、もともと抽象的な意味、すなわち、時間における一般的な限定という意味が形成されていく (...) ロシア語の歴史をとおして、接頭辞は、このような純粋に語彙的な意味 (筆者注：空間的意味) を保持しなくなり、次第に完了体と不完了体のAspectの違いを形作る文法的な役割を果たすようになる。この接頭辞のAspect的役割が確立されてくると、それによって、時間的に限定された動作を表す完了体動詞と、時間的な限定との関係をもたない動作を表す不完了体動詞という対立が次第に発達することになる。 (...) 古代の、継続時間の長さという意味は、新たな、不完了体の意味と合流し、一方、古代の、瞬間の意味は、新たな、完了体の意味と合体するようになった。この新たなAspect体系の発達は、古い時制の体系を破壊することになり、この破壊は、さらに明確なAspectの対立を招くこととなった」[2:346-348]。

イヴァノフの指摘するように、もともと空間を表す前置詞が時間的意味を発達させ、そこから時間的意味をもつ接頭辞が発達し、時間的な限定の意味が形成されることにより完了体と不完了体との対立が形作られてきた。イヴァノフが言及しているのは接頭辞と体の形成との関係であるが、このような体の形成プロセスの中で、接頭辞のもとである前置詞そのものの「В」・「на」の時間的意味が、限界性・閉鎖性という点で差異化してきたことと、不完了体・完了体の限界性・閉鎖性という意味の対立が発達してきたことの間にも相関性があると推論することが可能であろう。すなわち、ロシア語の歴史において、時の前置詞「В」と「на」との意味的差異化は、限定的で閉じられているという意味を有するか否かによって、動詞のアスペクト的差異化と相関して起きたと想定することができるのである。

結語

以上考察してきたように、完了体と不完了体が表す時間的特徴を、時間を表す前置詞の「В」と「на」が表す時間的特徴と対照することによって、以下のことが明らかにされた。

- ① 完了体によって表されるのは、限界性をもつ閉じられた動作であり、不完了体によって表されるのは、閉じられていない動作、あるいは、半分閉じられた動作、つまり完全な閉鎖性をもたない動作である。閉鎖性をもつという点で完了体は有標項であり、非閉鎖性という点で不完了体は無標項である。
- ② 前置詞「В」は、時間の限界性および閉鎖性という完了体と共通のイメージを表し、一方、前置詞「на」は、非閉鎖性という不完了体と共通のイメージを有している。この点で、完了体と同様に前置詞「В」も有標項であり、不完了体と同様に前置詞「на」も無標項である。
- ③ ロシア語の歴史の中で、時間を表す前置詞「В」と「на」の意味的差異化と、動詞のアスペクト体系の差異化が次第に進行していったが、これらの差異化は、「限界性」と「閉鎖性」という共通のイメージによって、相関して起こったと想定することができる。
- ④ プロセスを表す不完了体の場合、話し手の視点はプロセスの中にあるが、一般的事実を表す不完了体では、話し手は、あたかも上から

の視点でその完遂の時点や動作の存在そのものを俯瞰していると考えられる。不完了体が一般的事実として結果を意味することができるのも、話し手が、プロセスの外にいて、プロセスの終わりにだけ視点を合わせているからであり、それにより、半分閉じられた動作として認識されるのであろう。

- ⑤ 接頭辞 *za-* が付く起動相動詞の単体動詞は、他の完了体動詞と同様に閉じられた動作を示す。また、類像性という視点から見れば、1語で表される、接頭辞 *za-* が付く単体動詞は、一括的認知という類像性を、一方、2語で表される *начать (стать) + 不完了体* は、始動 + 継続性という非一括的認知の類像性を表している。

マースロフ (Маслов Ю.С.) は「体は、主観的・客観的カテゴリー、特に解釈的カテゴリーに属するものであり、そこでは、言語の諸形態において客観的言語外事実が見極められるような観点が設定されるのである」[5: 5-6] と述べている。この言に倣うなら、時の前置詞 «В» と «на» も、このような解釈的カテゴリーに属するものであり、そこでは、客観的言語外事実が見極められるような、限定性・閉鎖性という認知的観点からアスペクトと同様の意味的差異化が歴史的になされてきたと言えるのではないだろうか。

СПИСОК ЛИТЕРАТУРЫ

1. *Бондарко А. В.* Проблемы грамматической семантики и русской аспектологии. СПб., 1996.
2. *Иванов В.В.* Историческая грамматика русского языка. М., 1983.
3. *Исаченко А.В.* Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Братислава., 1960. Ч. II.
4. *Ломтев Т.П.* Очерки по историческому синтаксису русского языка. М., 1956.
5. *Маслов Ю.С.* Очерки по аспектологии. Л., 1984.
6. *Розенталь Д.Э. Джанджакова Е.В., Кабанова Н.П.* Справочник по правописанию, произношению, литературному редактированию. М., 1994.

18 井上幸義

7. Русская грамматика Т. 1: Фонетика, фонология, ударение, интонация, словообразование, морфология. М., Академия наук СССР, 1980.
8. *Янович Е.И.* Историческая грамматика русского языка. Минск., 1986.